

さくらタイムス 令和6年9月号

お題は「大谷選手のバット」です。ニュースになったオリジナルバットには、愛犬のイラストとともに「改善」の文字がありました。大谷選手であればお名前の通り「飛翔」とか「跳躍」などスピード感のある言葉の方がと一瞬違和感を覚えました。なぜなら、「還暦越え昭和」の頭にある改善のイメージは、きれいに整理整頓された清潔感のある町工場などの事業所の壁に掲げられた達筆のスローガンで、その内容は、毎日必ず立ち止まってどこか間違ったか足りない点を見つけ善処を繰り返す、というものだったからです。しかしその後のまた一瞬で「大谷選手は高校時代から中村天風氏の本を愛読し、昭和の大起業家の多くも天風氏を師事されていた」ことを思い出し、先のイメージ通り、毎日毎日自己点検を怠らず、見つけた「改善点」に取り組めば、もれなく着実に進化し続けることとなり、それはまさしく大谷選手が高校から日本のプロへ、その後渡米し大リーグへと様々な記録を打ち立てながら躍進されている姿そのものだと納得しました。

ただ改善の初めの第一歩である「自己点検」は、鏡の前に裸で立って全身をチェックするようなことで、日々の習慣にするのは苦痛さえ伴い大変難しいと言えます。大谷選手は、子どものころからお父様と一緒に風呂に入り、素振りを繰り返してフォームを見ていただいていたそうです。筋肉や骨の動きなど隠しようもない状態で「チェック・指導」を毎日受け、最終的に右打ちか左打ち

かを決める際にもお父様のアドバイスがあったそうです。

これほど素晴らしい「英才教育」があるのでしょうか。外部からなにか良いものを足す前に、子どもが今楽しんでいることで、自分では点検しづらい「現状」を肉親が愛をもってしっかりと見つめ・把握し、それを本人に理解させ一緒に「改善」し続けるのです。子どもは承認欲求から「見て見て」と保護者や先生のアテンションを引こうとします。この時によおくよおく見つめて、良いところは思いっきり褒め、改善点があれば優しく一緒に付き合っあげ、これを繰り返すことで素晴らしい成果へと繋がってゆきます。

まずは一緒に楽しく継続できることを探してみてください。さくらの子供達は、まだ幼いながら素晴らしい集中力と教えてもらえば楽しみながら実行できる能力をすでに持っています。10月には運動会があります。さくらでみんな一緒に「改善」を続けた素敵な姿をどうぞお楽しみにされてください。

園長

山内 香幸